（第3種郵便物認可）

福井新聞創刊120周年

ふくい未来戦略

vol.06

敦賀港の港湾運送事業を核に、貨物自動車事業、旅客観光事業などを手掛ける「敦賀海陸運輸」。敦賀港の開港120周年の今年、戦略の根底にあるのは、港町敦賀を支えてきた歴史と地元貢献への熱い思いだ。

（聞き手／吉田真士・福井新聞社代表取締役社長）

敦賀の港と街の発展を支える会社であり、人でありたい。

敦賀海陸運輸 株式会社

代表取締役社長
有馬 茂人氏
Arima Shigeto

大きく伸びる取扱量。博多航路も新設。

吉田　御社が、敦賀港で港湾運送を担うことになった由来は。

有馬　敦賀港は古くから大陸との交易拠点であり、欧州との連絡地としても栄えました。弊社は地元運輸業者6社が合併し、75年前に設立。港湾運送は公益性の高い事業であり、私たちは成り立ちから地元に貢献し共に歩むことを使命にしています。

吉田　福井新聞も地元の地域の小さな新聞が合併して誕生しました。「地元と共に」という部分で非常に共感します。それにしても、敦賀港が日本海側では新潟港につぐ第2位の取扱量を誇ることは、あまり知られていないのでは。

有馬　そうなんです。敦賀港は関西・中京圏向け物資の日本海側最大の供給ルートです。これは高速道路や国道などの幹線道路、そして鉄道の駅も近いという「地の利」が大きいですね。昨年の取扱量は1千6百万トンで、この10年間で11％増と順調に伸びています。

吉田　すごい躍進ですね。

有馬　トラック運転手の不足とCO_2削減のため、陸路輸送から船舶への転換を目指す国の「モーダルシフト」政策が追い風になっています。今年4月には近海郵船が博多航路を開設。敦賀を中継点として北海道ー九州間を最短で結べるようになりました。近年は豪雨などの災害で陸路交通が寸断されることもあって、再び船舶輸送が見直されており、敦賀港にも注目が集まっています。今は自動車部品などが特に増えており、今後も幅広い分野で取扱量の増加を見込んでいます。

荷物は刻々と変化。素早い対応が必要。

吉田　主な仕事は貨物の積み降ろしや保管ですか。

有馬　ええ、船や積み荷の種類に合わせた対応が必要です。例えば、荷物を積んだ車両ごと船内に入れるRORO船の場合、北海道便から九州便への積み替えのタイムリミットは1時間。大型トレーラーが次々と乗り降りする中、大型車両を限られたスペースにきっちりと並べていくのは職人技です。港は夜間が最も忙しく、協力会社も含めて100人余りの連携プレーで毎日乗り切っています。

吉田　活気に満ちた時間ですね。どんな荷物を扱うのですか。

有馬　荷物は経済環境や国際・社会情勢などの影響を受け、年単位や月単位で変わります。すると、作業内容だけでなく港の設備も一変します。3年前、木質バイオマス発電所の原料チップの受け入れの際には荷揚げ用の大型ベルトコンベヤーを設置しました。現在は北陸新幹線建設工事関連の資材が次々入っており、9月から長さ25メートルのレールの荷揚げも始まっています。荷物によって、港周辺の風景はどんど変わるんですよ。

吉田　最近は外国の大型客船の寄港も増えているようですね。

有馬　敦賀港はスペースが手狭になってきていて、大型客船の受け入れにはその都度港内の荷物の大移動が必要になります。しかし1回で4000人もの方が敦賀に来ていただけるとあって、地元への経済効果も大きく、私たちもやりがいがありますね。現在2021年の完成を目指して新たな岸壁の整備が進んでいます。インフラ整備は時間がかかるので、整備する国や県などの自治体と共に、数年先の状況を見越しながら手を打っていくことが大切になりますね。

「地元を支える」。会社の変わらぬ理念。

吉田　公益性の高い事業を担う御社ですが、社員にはどのような教育をされていますか。

有馬　一人が複数の作業をこなす「多能工化」を進めることで、大型客船の受け入れ等の物事を考えられる社員の育成を目指しています。若い社員にも積極的に重機の資格を取得させ、スキルを磨いてもらいます。また弊社はバスやタクシー、旅行業も手掛けていますが、2023年春の北陸新幹線開業と連携した対応も必要でしょう。そうしたことを社員に求める一方で、これまでよりも安心して働ける労働環境の整備を進めています。

吉田　地域の中で活躍する社員も多いとか。

有馬　会社の業務を通して敦賀の発展に寄与することはできますが、社員一人一人が地元に貢献できる人間であって欲しいと願っています。元々社内には「仕事だけでなく地域の役に立って一人前」という風土があり、区長や消防団員などを務める社員やOBが多いんです。

吉田　素晴らしいことですね。これから目指す会社像は。

有馬　社員の子どもたちが、親が勤めていることを自慢に思える会社、若者が「ここで働きたい」と思えるような会社です。この街の象徴と言える敦賀港のオペレーションを預かる者としての誇りを持ち、社員一人一人の力を結集して地元敦賀の発展に寄与していきたいと考えています。

2代目大和田荘七が外国との交易を拓き120年。鉄道の登場で北前船航路が衰退の危機にあり、海外に活路を求めての決断だった。「今和に入り北前船航路はRORO船という形でよみがえりました。時代と共に価値観は変わるということですね」と、有馬社長。

1／本社社屋　2／港に揚がった荷物を、中京・関西圏にトラックで届ける　3／旅客事業では、タクシーやバスでの輸送、旅行業も行っている

敦賀海陸運輸 株式会社

本社／敦賀市桜町2-10　TEL.0770-22-3111
URL／https://www.tsurugakairiku.co.jp/
創業／1943年10月　従業員数／309人
事業内容／港湾運送事業（コンテナ・一般貨物・外航RORO・内航RORO・船舶代理店業・倉庫業・通関業）、貨物自動車運送事業、旅客観光事業（タクシー・バス・旅行業）

企画・制作：福井新聞社営業局

©福井新聞　無断複製・転載を禁じます